
回天

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

回天

【Nコード】

N7681D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戦局は追い詰められようとしていた。その中で彼等は己が命を賭してでも日本を守ろうとしていた。その彼等の心が今回天に込められる。第二次世界大戦において本当にあったお話です。今この方々は靖国におられます。

第一章

回天

戦局は追い詰められていた。勝利は遠いものになっていた。

多くの精鋭や軍艦、航空機を失い劣勢を覆すことすらできなくなっていた。その状況は誰もがわかってはいたがそれをどうこうすることもできなくなってきた。

そのことは当然ながら海軍の首脳達もわかってはいた。わかっていたもだった。

「だからこそです」

「ここは」

今日もその首脳達のところに若手士官達が来て己の案を述べていた。彼等も必死だった。

「これの使用を許可します」

「何とぞ」

「何を馬鹿なことを言っておるか！」

その海軍の提督は己の部屋の中で怒鳴った。端整で引き締まった古武士を思わせるその顔に怒張が浮き上がっていた。

「何故そんなものを実用化せねばならんのだ」

「全て勝利の為です」

「だからこそ」

見れば二人の若い海軍士官が提督の前に立ち必死で述べていた。彼等も引く様子はない。

「この研究の許可と実用化を」

「何とぞ」

「実用化してどうするのだ」

提督は二人に問うた。先程は怒鳴ったが今は普段の冷静さを取り戻していた。

「死ぬつもりか？」

回天

「無論」

二人のうち大尉の階級章を着けている者が述べた。もう一人は中尉だ。

「最初からそのつもりです」

「我々は死なぞ怖れてはいません」

彼等も迷うことなく言うのだった。その言葉には純粹さしかない。

「まずは我々が」

「そして奴等に大和魂を見せてやります」

「大和魂か」

提督はそれを聞いてあらためて考える顔を彼等に見せた。そうして諭すように言うのだった。

「いいか」

「はい」

「戦うのはいいことだ。わしはそれは否定せん」

彼も海軍の男だ。それは否定しはしない。

「だがだ。それでもだ」

「命を捨てるなと仰るのですか？」

大尉が彼に言葉を返した。

「そうだ。粗末にするな」

「粗末に」

「命は一つしかない」

あらためて二人に告げた。

「それを粗末にするな。いいな」

「粗末にするのではありません」

だが二人はそれを聞かない。聞けなかったのだ。

「かけるのです」

「かけなければならぬ時に」

「あえて死ぬ、というのか」

提督はそこまで聞いて呻くように言った。

「戦いにおいて」

「戦いにおいて死ぬのは当然ではありませんか」

「問題はその死に方なのではないですか？」

二人はこう提督に問い返すのだった。彼等もまた必死であった。

「これは無駄死にはありません」

「敵を葬り去りそして」

「そして？」

「その心を見せる死です」

「敵に我等の」

「我等の、か」

提督はそれを聞いてまた考える顔になった。腕を組んであらためて考える顔になる。

「そうです。我等皇国の者達の心を」

「それにより敵を怖気づけさせるのです。さすれば勝利は見えます」

「最早。そうしなければならぬというのか」

提督はそれを聞いて呻いた。呻かざるを得なかった。

「今は」

「残念ですが今の戦局は」

二人は俯いて述べてきた。

「我が国にとつては」

「本来ならば我々もこうしたことは申しません」

ましてや相手は提督だ。尉官が簡単に意見を述べられる筈もない。しかも提案していることは死を前提としている。損害を恐れないといつてもそうした問題ですらなかった。

「しかしこのままでは日本は」

「敵に蹂躪されてしまいます。ですから」

「あえて死ぬというのだな」

「はい」

二人は提督に対して答えた。

「我が国の為に」

「あえてこの命を」

「無駄に死ぬわけではないか」

提督はそのことを思う。戦場で死ぬのは当然だ。しかしそれが無駄であつてはならない。ましてやあえて死に行くなぞ。しかし彼等はそれを無駄死にではないと主張する。彼も話を聞いているうちにそんな気になつてきていた。何よりも彼等の強い心に感じるものがあつた。

「そうです。だからこそ」

「開発、実用化をお許し下さい」

「今は何も言えぬ」

しかし即断は避けた。こう二人に告げるだけだつた。

「だが。考えてはおく」

「何とぞ」

「御願ひします」

二人はなおも引き下がらずに言う。それだけ必死であるといふことだつた。

「考えておくから今は下がれ」

しかし提督は今二人を下がらせるだけであつた。彼としても今は二人に冷静さを取り戻してもらいたいという考えがあつたのだ。

「わかつたな。よいな」

「・・・・・・はい」

「それでは」

ここまで言われてようやく退くのであつた。だが二人の考えは変わらなかつた。木造の廊下を並んで歩きながら話をしていた。

「黒木大尉」

中尉の階級の男が大尉の男に声をかけてきた。

「このままでは危ういのではないでしょうか」

「回天の開発と実用化だな」

「そうです。このままでは」

「わかつている」

黒木と呼ばれたその男は彼の言葉に応えた。

「このままではな。確かにその通りだ」

「ではどうされますか？」

「他の方にもお話しよう」

黒木はそう中尉に告げた。見れば彼の顔にも焦りがある。彼とても時間を無駄にはできなかつたのだ。

第二章

「仁科関夫中尉」

「はい」

黒木が中尉の名を呼ぶと彼はそれに応えた。

「貴様と俺とで何としても回天を実用化させるぞ」

「無論です」

仁科と呼ばれた中尉は黒木の言葉に応えた。真剣な顔で。

「そして日本を守りましょう」

「命をかけてな」

二人は誓い合うのであった。この時日本は敗戦続きでいよいよ危なくなってきた。肌でそれを感じているこの二人の焦りと憂いは相当なものだったのだ。

黒木博司大尉と仁科関夫中尉。彼等はそれぞれ海軍兵学校を出た優秀な者達である。海軍の若手士官達の殆どもまた今の日本の劣勢を憂いていたのだ。その中には彼等の様に命を捨てても日本を救おうという者達がいた。彼等もそのうちの二人であったのだ。

その彼等の訴えは続いた。二人だけでなく多くの者が何としても命を捨てても日本を守りたいと叫び続けたのだ。そしてその心は遂に海軍首脳にして苦渋の決断を下させたのだ。

「これは兵法の外道だ」

中将である大西滝次郎は言った。

「それはわかるな」

「はい」

参謀の一人が彼の言葉に頷いた。今彼等は大西の部屋において話をしてきた。そこで誰も入れず話をしていたのである。

「それは無論です」

「しかし。やらなければならぬ」

大西の言葉は苦渋に満ちたものだった。

「今の我が国は。そうでもしなければ」
「なりませんか」

「そうだ。我が国は生き残らなければならない」
大西も軍人だ。祖国の為に戦っている。だからこそであった。何をしてでも日本を生き残らせなくてはならなかったのだ。軍人として。

「だからこそだ」

「わかりました。それでは」

参謀はその言葉に頷くのだった。

「あれについてもですね」

「認めるしかあるまい」

大西はまた苦渋に満ちた言葉が出た。

「彼等は。最初からそのつもりだ」

「そうですね」

参謀もそれはわかっていた。

「何もかもを捨ててそれに向かおうとしているのですから」

「だからだ。その心を無視することもできないのだ」

その四角い顔に苦いものを満たして言葉を続ける。

「私は。万死に値する罪を背負うことになるが」

「閣下」

参謀はその苦い顔になる彼にまた言うのだった。

「その様なお考えは」

「駄目だというのか？」

「そうです。御気を落とされずに」

「うむ」

何とかといった感じで彼の言葉に頷いた。

「わかった。それではな」

「とにかく。何があっても日本を守り抜きましょう」

参謀は大西を励ます為にこう述べた。

「その為に」

「わかった。私も鬼となる」

苦い顔のままだったが言葉を出した。

「それでいいのだな」

「御願います」

大西も苦しかった。その憂いの中で苦悩していた。大西は終戦直後自害するがそれは苦悩からの解放だったのであるうか。この深い苦悩から。

黒木と仁科の案は通った。彼等は晴れて開発と実用化を認められたのだ。

「やったな、仁科」

「はい、大尉殿」

二人は笑顔だった。海を背景に今笑顔で頷き合っていた。

「これで我等の悲願が果たせる」

「我が国の為に戦うことを」

「命をかけてな」

黒木はそれが果たせることにまずは満足していたのだ。

「では。用意はいいな」

「何時でも宜しいであります」

仁科はこう黒木に答えた。

「今からでも」

「よし、よく言った」

黒木はこの言葉を聞いてまた笑顔になる。会心の笑みといった感じであった。

「では。すぐに取り掛かるぞ」

「はい、回天」

その兵器の名を今出した。

「是非実用化させましょう、我が国の為に」

「日本の為に」

海を見ながら誓い合う。その決意は今彼等が立っている岩よりも硬かった。その決意を胸にすぐにその回天の開発に取り掛かった。

この回天は特別な兵器であった。

人間が乗り込む魚雷なのだ。つまりは特攻兵器だ。乗り込み出撃する者の命は当然ながらない。だが彼等はそれを承知のうえで開発し実用化しようとしているのだ。全ては日本の為だった。そこには狂気も妄執も何もなかった。ただ日本の為に戦いたい、そして死にたい。ただその心があるだけであった。

その心を胸に日々開発に取り組む。開発が整った後はテストであった。これまた日々乗り込み回天のテストにいそしむのであった。

「今日はどうだったか」

「駄目です」

二人は回天から出て話をしていた。周りには彼等に賛同する者達が揃っていた。彼等もまた日本の為に命を捨てる気でいたのだ。

第三章

「速度が出ません」

「そうか。速度がか」

黒木はそれを聞いて沈んだ顔になる。そのうえでまた言うのだった。

「はい。今一つ伸びがありません」

「わかった」

それを聞いて頷くのだった。

「それならば。そこを改善していくか」

「また見直しですね」

「当然だ」

今度は仁科が落ち込む顔になるがそれに言葉を返したのは黒木であつた。

「わかっている筈だ。俺達はこれに命をかけている」

「はい」

それはもう誓い合つたことだ。しかし今はそれをまた言わなければならなかつたのだ。全ては回天の実用化、そして日本の為いだ。

「だからだ。何事も惜しんではならないのだ」

「そうでした」

仁科もそれを思い出す。思い出しそれを噛み締める顔になつた。

「申し訳ありません、私が間違っていました」

「謝る必要はない」

それはよしとした。

「わかれば何をするべきかだ」

「そうでした。それでは」

「そうだ。すぐに再び設計図を見直すぞ」

話はそこに戻つた。

「そうして速度をあげる。いいな」

「わかりました」

彼等はまた設計図から見直す。そうして再び回天を調べて速度をあげるべく不眠不休で働きだした。過労で倒れそうになるうとも彼等は勤しむ。全ては彼等の志の為に。

そんな日々が続く回天の開発は進んでいた。しかしそんな中でのことだった。

黒木が乗っていた回天が沈んだ。そのまま浮かんで来ない。翌日黒木が乗り込んでいた回天が引き揚げられた時にはもう黒木は事切れていた。しかし彼はその手にペンを握っていた。その手許には文があつた。そこに書かれているものは遺書であつた。言うまでもなく黒木の書いた遺書である。

「大尉殿、死を前にして」

仁科はその遺書を見て言った。黒木の顔は意を決した顔でそこには苦しみを越えた清らかささえあつた。彼は本当に死を受け入れたのだ。

「この様なものを」

「何と書いてあるのだ？」

同志達が遺書を手に持っている彼に問うた。

「大尉殿は。何と」

「読んでくれ」

仁科はその遺書を彼等に手渡した。

「俺には。もう」

「俺には？」

「読むことができん、済まん」

声が泣いていた。そう言いつつむせび泣いていた。

「これ以上はな」

「そうか、わかった」

同志達は彼のその涙を受けた。全てを察して。

「では俺達も読む」

「それでいいのだな」

「ああ、頼む」

そう言つて俯く。涙は必死に堪えているがそれでも限度があつた。

「俺はここで聞いておく」

「わかつた。それではな」

「読ませてもらおう」

しかしその彼等も読んでいるうちに次第にその言葉を消していった。声が詰まりその声がすすり泣きに変わっていく。仁科はそんな彼等を見て只事ではないのを感じ取つた。すぐに彼等に対して問うのであつた。

「どうしたのだ」

「済まん」

彼等の中の一人が仁科に謝罪する。

「我々にはもう」

「これ以上読むことはできん」

「これ以上。何が書いてあるんだ」

仁科は彼等に問う。しかしやはり彼等はその問いに答えることができなかつた。涙のあまり言葉がどうしても出なくなつていたので。

「済まん……」

「もうこれ以上は」

「……わかつた」

仁科も彼等の心がわかつた。こうなつては自分で読もう。そう決心してむせび泣く彼等からその手紙を受け取つた。見れば片仮名と漢字で書かれたその遺書は。事前の状況や事故が起こつてからのこと、応急処置、所見、そして回天と同志達への追伸が書かれていた。そこには仁科の名もあつた。最後には平仮名と漢字で辞世の句まで書かれていた。

第四章

男子やも我が事ならず朽ちぬとも留め置かまし大和魂

国を思い死ぬに死なれぬ益良雄が友々よびつ死してゆくらん

「俺のことまで」

「そうだ」

「死ぬその時に至るまで。ここまで思っていたんだ」

皆黒木のその心に打たれたのだ。最後の最後まで帝国海軍の軍人であるということへの誇りを失わず天皇陛下と日本に忠誠を死んだのだ。そこには共に死んだ樋口大尉の遺書もあった。彼等は最後の最後まで立派な軍人として死んだのだ。この遺書が何よりの証であった。

「黒木大尉……」

「仁科」

「俺達は無駄にはいけない」

彼等はまだ泣きながらも仁科に声をかけてきた。その声には何の澁みも迷いもない。ただ純粹さと決意だけがある声であった。

「続こうじゃないか」

「大尉達に」

「ああ」

仁科は彼等の言葉に頷いた。見れば彼も泣いていた。しかし涙をそのままにして応えていた。黒木の遺書には自分へ後事を託すと書いてある。彼はそれを喜んで受ける決意をしていた。だからこそ今はその涙をあえて拭かず同志達に伝えていたのである。

「何があってもな」

「この命、陛下と皇国に捧げる」

「俺もだ」

回天

彼等はあらためて誓い合う。

「黒木大尉と樋口大尉に続くぞ」

「靖国で会おう」

靖国という名が出た。言うまでもなく靖国神社のことである。これまでの日本を守る戦いで散華した英霊達を祭る社だ。彼等は死すればそこで会おうと誓い合い戦場で果敢に戦ったのだ。それがこの時代であり過去の日本の戦いもそうであったのだ。

「そうだ、靖国には大尉殿達もおられる。だからこそ」

「回天を何としても完成させ」

「英霊となろうぞ」

死ぬことを誓い合う。傍から見れば異様かも知れない。しかし彼等は正常であつた。その心そのまま回天の開発を進める。そして遂にその回天が完成し実戦部隊として配属されていった。死ぬ為の兵器が。今こうして完成され配備されたのである。

昭和十九年十一月。戦局はいよいよ逼迫したものになり多くの戦士達が散華していつていた。レイテ沖における海戦では神風特攻隊が出撃しその若い命を散華させていた。回天の部隊も遂に実戦部隊として配備された。その中には言うまでもなく仁科の姿もあつた。

「貴様の部隊は二十日に出撃だ」

「二十日ですか」

「そうだ」

苦い思いを必死に噛み殺した司令官からの言葉だつた。

「多くは言わん。わかつたな」

「はい」

司令官のその言葉に静かに頷く。

「それでは司令。今まで有り難うございました」

「うむ。何か言い残すことはあるか」

司令は仁科にそれを問うた。簡素な司令室にいるのは二人だけだ。

彼はあえて仁科をこの部屋に呼び話をしているのである。

「あつたら聞くが」

「宜しいでしょうか」

「うむ。ならば言ってみろ」

仁科の言葉に応えて頷いて述べる。

「それで。何なのだ」

「一つだけ心残りがあります」

彼はそう司令に告げた。

「心残りか」

「はい。子孫を残せなかったこと」

彼は言った。

「それだけがたった一つの心残りであります」

「そうか。それだけなのだな」

「はい。それだけが」

彼はまた言うのだった。

「他は何もないのですが」

「わかった。ではその言葉受け取った」

司令は頷いて仁科に対して述べた。

「それでは。行って来い」

「はい、見事敵を撃ち滅ぼしてみせます」

敬礼をしてから敵かに述べた。

「護国の鬼となって」

「貴様等のこと、何があっても忘れぬ」

司令は唇を噛み締めていた。その心の奥から湧き起こるものから必死に耐えながらの言葉だった。その耐えているものとの葛藤が彼を苦しめている。しかしそれに耐えながら彼は言うのだった。彼も辛い。しかしこれから散華する者達のことを思い何とかそれに耐えていたのだ。

「だから。行って来い」

「はい、それでは」

また敬礼をして部屋を後にした。彼の出撃の時が迫っていた。

十一月二十日、まずは共に出撃する三人と共に記念写真を撮った。

海軍士官の礼服に身を包み日本刀と手にして四人並んでの撮影だった。共に出撃するのは福田中尉、渡辺少尉、佐藤少尉の三人である。彼を入れて合計四人の戦士達がいよいよ最後の戦場に向かうのだった。

「後のことは任せろ！」

「靖国で会おう！」

同志達が最後の言葉を投げ掛ける。彼等も後に続く。しかし今は仁科達を見送るのであった。敬礼し潜水艦に乗り込む彼等に皆が礼服で帽子を振る。海軍の別れの挨拶であった。

「行くか」

「はい」

皆仁科の言葉に頷いて潜水艦の中に入った。潜水艦は回天と彼等に乗せたまま出撃していく。仁科は最後に回天に乗り込む際に刀とある少女が回天の隊員達に贈った布団を入れた。最後にこの二つと共に死ぬつもりだったのだ。

「………悔いはない」

彼は回天の中に入りながら呟いた。その顔には一点の曇りもなくただ純粹さと清らかさだけがあつた。

彼も同志達もこの二十日に散華した。仁科もまた遺書が残っている。両親等にあてた遺書だ。そして彼もまた最後に辞世の句を残している。こうした歌だ。

君が為只一筋の誠心に当たりて碎けぬ敵やはあるべき

この歌のまま散華して果てた。その魂は靖国に入り今もある。

彼等のことを知る者はもう少なくなってしまった。貶める愚か者達はまだいる。死者を、英霊を冒瀆することに何の意識もない者達が。しかし彼等が何を想い何の為に戦い、何を護る為に散華したのか。それは知っておかなければならない。その為にこのことを書き

残しておく。彼等のことは歴史に残されている。その歴史のことをここに記してこの話を終えることにする。彼等のことを一人でも多くの心ある人達に知ってもらおう為に。

回天 完

2008・2・18

回天

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681d/>

回天

2008年11月20日22時30分発行